

## 二子の半日

田 山 花 袋

十年振りで二子の亀屋に行つて半日遊んだ。これも随筆社の人達の好意である。ことに平生その名ばかり知つて、その作品ばかり読んで、容易に会えなかつた人達にも言葉交えることが出来たのは、いつも書齋にのみ引籠勝ちの私に取つて二重の喜びと言わなければならなかつた。

亀屋は一番初めは国木田と一緒に رفتと覚えている。「忘れ得ぬ人々」にある亀屋は、これではなくて、もう少し先きの溝口にある旅舎だが、今は何うしたかしら？ 私達は死んだ国木田のあとで、吉江君や前田君などと一緒にわざわざその旅舎の前まで行つてその内を覗いて見たことがあつたが、その時分のことを考えると何とも言えずなつかしい。国木田は聞えた郊外散歩者であつたから、ひとりよくここらをあちこちと歩いたらしい。武蔵野の櫟の若葉の美しさなどをかれらはいつも私に話してきかせた。

二度目に私は前田君と行つた。何でも「文学世界」の生れた翌年の正月であつたと思ふ。その時分にも、玉川電車はもはや出来ていたが、まだ静かで、此方の岸の茶屋などは一軒もなく、田舎蕭条いなかしょうじょうという、感じが名残なくあたりを領していた。石原の中に布を引いたように青く速く流れている多摩川の水もわかいい心を楽しませ、その周囲をめぐっている大きな櫟の木の緑葉も燃えた心を

静めるには十分だつた。その時分には、あの亀屋の二階の廊下に立っていると、人の顔も青く見えるほどそれほど新樹の彩が深く且つ濃こかであつた。今は川こそ此方の岸に偏ひとへつて流れるようになっていたけれども、その櫟の大きな樹は大方伐られて、あたりがわるく開けて了つていた。惜しいことだと思つた。

三度目には姪と来た。この姪は今ほさる音楽家の妻となつて子供も大勢あるが、何方かと言えばはしゃぐ方の質で、わざとお茶屋の姐さん風に髪を銀杏返しにして、お召の前垂などをして、何う見ても唯ではなような恰好をして私達はやつて来た。「おじさん！ こうしていると、誰が見ても、唯とは思われないわねえ！」姪はこんなことを言つて笑つた。今日考えて見ると、お互いに一種の副製作用と言つたようなものを楽しんでいたのであつた。

その次には、中沢臨川君と吉江君と前田君と四人でやつて来た。その日は私達は井の頭弁天から深大寺を訪まい。それから調布へ出て、登戸から二子へとやつて来たのであつた。私達は飲んでいる中に最終の電車に間に合わなくなつてとうとうそこに泊つて了つた。その時も矢張五月の初めであつたのに拘らず、澁刺とした小さな鮎あなが食えた。

「私に取つては、此処は思い出が多いんですよ。何しろ、国木田と来たのも、もう随分昔ですからな……。今日こうして諸君と此

処に集るといふことも何とも言われない気がしますねえ」こう私は言わずにはいられなかった。私は欄干に立ってあたりを眺めた。すぐ向うに川が流れていて、渡場にはひらべったい船に自転車だの車だの工夫だの女だのの混雑乗って来るのが見えた。

久米君の持って来た活動写真の機械は大きな重いものだった。「大変ですね。これを持って来るのは？」こんなことを私は言った。誰も彼も皆なその前に立たせられた。里見君が二人の可愛い男の児と一緒に自転車を乗り回した形も、葛西君がビールのコップを持った形も、水守君や中村君が笑った帽子を取ったりした形もすべて皆なそのフィルムの中に入った。私の白髪頭も近松君の洋服姿もやがてその中に入った。「何うも回り具合が変だね？たぐれていはしないか？」久米君がこんなことを言いながら、蓋を取って見ると、果して二三十尺ほどたぐられていた。「でも、大丈夫だ前に撮った奴は大抵映っている！」

それから私達は川の方に行った。水は瀬を成し渦をつくって折れ曲って流れて行っている。渡舟は落日を帯びつつ此方の岸へと近寄って来る。次第に夕暮近い空気が濃かにあたりを籠めて行った。

私はこういう気がした。(親しい友達との郊外散歩も好いだろう？しかしこうした半日もまた楽しいではないか？それはお互いに芸術にいそむ身であって見れば、時には議論も闘わすこともあるだろう？わる口も言うこともあるだろう？意見の相違からついで感情のもつれて行くこともあるだろう？)

う？しかしそれはお互いのことである。真面目なればこそ、真剣なればこそ、本当のことを言おうと思えばこそ、声も高く語調も鋭くなつて行くようなものである。そんなことは何うでも好いではないか。兎にも角にも、お互いにこうして芸術というものを捨てずにやって来たという心持は同じではないか。それを思えば、こうして会合もまた楽しいではないか？)で、私は近頃にないほど好い心持になつて酔った。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。

※出典 当館所蔵「随筆」第2巻第5号(大正13年6月1日)